７月２６日（日）主日礼拝レジュメ
「空しさからの解放」　伝道者の書２章１８～２３節

１８節「私は日の下で骨折った一切の労苦を憎んだ」とあるが、問題はその人の死後、労苦して得た富はどうなるのか、誰のもとへ行ってしまうのかということ。そして、死後残していく財産について人は自分でどうすることもできないことに、伝道者は強い不満を持ち、「それゆえに私は日の下で骨折った一切の労苦を憎んだ」と言っている。

１９節では彼の労苦の実は後に残る者が支配するようになると言い、もし跡を継ぐ者が愚か者であったとしたならば、なんと空しいことかとこの人は言う。

２０節「私は、日の下で骨折った一切の労苦を見渡して、絶望した。」とあり、絶望したとは、彼の労苦に対する意味と満足を見出すことができないということ。

２０節の絶望の理由をなぜならという接続詞で始めて、２１節で伝道者は説明している。２１節で語られていることは１８，１９節で伝道者が語ったことの語り直しであると言える。「何の労苦もしなかった者に、自分が受けた分を譲らなければならない」というのは、労苦の実を受けるに値しない者に自分が受けた分を譲らなければならないと考えれば絶望しかないではないかということであり、「これもまた空しく、倫理的に考えても「大いに悪しきことだ」と言う。

２２節において、伝道者は生きること自体にも価値がないのではないかとまで、この人は語っているように思います。この伝道者がどのような人生を送ったのか詳細は分かりかねるが、さまざまなことで思い煩いの多い人生を送っていたのではないかと思う。

ヘブル人への手紙６章１０節「神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れたりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。」神は「神の御名のため」に愛を示したこと、神の御名のために日の下で骨折った一切の労苦を忘れず、おぼえていてくださる。神の御名のためにしたことだけがいつまでも残る。そして、私たちが御名のためにしたことに神が報いてくださる。日の下で労苦したことも、思い煩って苦しかったあの日々も、悲痛と苛立ちの中、眠れぬ夜を過ごした自分の一生に神が忘れず、報いてくださると信じる時に、虚しさから解放される唯一の道がある。もちろん、神を信じるクリスチャンも、労苦の実は地上に残していかなければならないが、すべてを課にゆだねることができるし、神がそれに報いてくださると信じることができる。

神を離れ、人生において神を計算に入れないで、ただ日々自分の能力で、自分の才能や力を駆使し、骨折って労苦しながら生きるなら、自分の人生を最後に振り返った時に、自分の人生はいったい何だったんだろうかと思うようなことにはならないだろうか、人は神によって目的をもって造られた存在なので、神に出会って初めて、人生の空しさから解放される。ぜひこの神を信じていただきたい。